

【論文】

A terre と *par terre* の比較研究

本間 幸代

0. はじめに

A terre と *par terre* の二つの前置詞句¹は、これまでもしばしば比較研究の対象とされてきたが、次章で詳述するように、両者の使い分けについては未だ説得力のある説明はなされていない。本稿では、文脈によって *à terre* と *par terre* の入れ替えが不自然となる事例を複数分析し、両者の間で許容度の違いが生じるのは「*terre*」の指示対象の捉えられ方が異なることに起因していることを示す。更に、この捉えられ方の違いは、前置詞 *à* と *par* の意味的差異と関連していることも明らかにする。

1. *à terre* と *par terre* の比較に関する先行研究

M. Grevisse et A. Goose (2007 : 1341) は、以下のように、一部の表現を除いて *à terre* と *par terre* の使い分けに制約はないと述べている。

« (...) hors le cas d'expressions consacrées comme 'aller ventre à terre', 'mettre pied à terre', les auteurs emploient librement 'à terre' ou 'par terre'. »

しかし、下記の例に見るとおり、実際は *à terre* と *par terre* は入れ替えが不可能な場合が数多くあり、この M. Grevisse の説明は妥当であるとは言い難い。

- (1) (軍の隊長が兵士達に向かって) : « *Tout le monde (à / ??par) terre !* »
- (2) *Range tes chaussettes qui traînent (*à / par) terre.*
- (3) *Attention ! Tu vas tomber (*à / par) terre !*

E. Littré (M. Grevisse (1969 : 915) による引用) は、地面または床などの上に落ちるものあるいは倒れるものが事前に地面などと接触していたかどうかの違いとしている。

« A terre se dit de ce qui tombe ou de ce qui est sur le sol, à nos pieds, avec cette idée que ce qui tombe ne touchait pas le sol auparavant. Par terre se dit dans le même sens, mais avec cette idée que ce qui tombe touchait le sol auparavant. »

しかし、下記の例では、いずれも「自転車からの落下」が問題となっているにもかかわらず、一方は *à terre*、もう一方は *par terre* が選択されている。つまり、地面に落ちる（倒れる）ものが既に地面と接触していたかどうかということは *à terre* と *par terre* の使い分けの基準とはなっていないということであり、E. Littré の説明は支持し難いと言える。

(4) « Luke Durbridge, participant du Tour de France, s'est retrouvé à terre après avoir percuté un soigneur »². (下線筆者)

(5) « (...) Se retrouver par terre sans gants peut se révéler douloureux. La chute, c'est bien pour cela que les gants sont utilisés depuis des années pour protéger les mains. (...) »³ (下線筆者)

その他、*à terre* と *par terre* の違いは言語使用域 (registre) の差異に起因するとする説明もある。例えば、*à terre* は高尚な文体に属し、一方 *par terre* は大衆的でくだけた文体に属するというような説明である。例えば、G. Gougenheim (1939 : 303) は以下のように述べている。

« (...) 'par terre' n'appartient plus guère qu'à la langue populaire ou familière ».

しかし、以下の例に見るように、*à terre* はかなりくだけた文体で書かれたテキストにも少なからず見受けられる。

(6) « Mon école organisait ce week-end le plus grand festival gratuit étudiant de France. J'y ai passé 15 minutes, avant qu'un pote à moi se fasse choper par un groupe de 15 mecs qui l'ont foutu à terre pour le tabasser. (...) »⁴ (下線筆者)

また *par terre* は、下記のように文学作品の中で使われている例も少なからずある。

(7) « On apercevait, par terre, des programmes froissés, des tickets de métro. »

(DUHAMEL, Suzanne, 1941, p. 263)⁵ (下線筆者)

よって、à terre と par terre の違いは言語使用域の差異に起因するものであるとは考え難い。

以上概観してきたとおり、à terre と par terre の違いに関しては説得力のある説明は未だなされておらず、より詳しい分析が必要となる。以下に続く章では、まず à terre と par terre 間で同じ動詞が使われている場合の比較検討を通じ、両者の間にどのような差異があるのかを分析する。続いて à と par それぞれに関し複数の用法を分析することによって両前置詞間の意味的差異を明らかにし、その差異が à terre と par terre との差異にも反映されていることを示す。

2. à terre と par terre の比較

本章で提示する各例文に関しては、à terre と par terre を入れ替えた場合の許容度について二人のインフォーマントにそれぞれ個別にたずねた。全ての例文は、許容度に関して得られた回答がインフォーマント間でほぼ同一または同様である場合のみを選別して掲載してある。また例文中の下線は全て筆者によるものである。

2.1. se jeter (à / par) terre の場合

例 (8) は、フランス人の柔道家 Teddy RINER 氏と日本人柔道家の七戸龍氏との対戦の状況を説明している一節である。そして例 (9) は子育ての悩みに関する Q&A を掲載している web ページからの抜粋である。

(8) « (...) Le Japonais Ryu Shichinohe se jette à terre pour se défendre. Le Français évite une attaque et contre-attaque pour rester le champion du monde. (...) »⁶

(9) « Benjamin a 15 mois et un caractère très difficile. (...) Depuis quelques mois, quand je le gronde, il se mord ou se tape, ou bien il fait carrément une grosse colère en se jetant par terre. Que dois-je faire ? »⁷

例 (8) については、いずれのインフォーマントも、文脈的に par terre よりも à terre のほうが適切であると回答した。また、例 (9) において par terre を à terre に置き換えた場合については、1 人のインフォーマントが文脈的に少しおかしいと回答し、もう 1 人はかなり

おかしいと回答した。いずれの例においても、床に身を投げ出すという行為には変わりがないにもかかわらず、このように *à terre* と *par terre* は入れ替えが自由ではないことが分かる。では、上記二つの例の違いは何であろうか。まず気がつくのは、例 (8) では「*se jeter à terre*」という行為が、柔道における防御を意味しており、勝敗に影響を与えるような行為であるということである。つまり、「*terre*」は、文脈の中で特別な意味を持った空間であると発話者に認識されていると考えられる。一方例 (9) では、「*terre*」が文脈において特別な意味を持っているとは考えにくい。

2.2. *Se retrouver (à / par) terre* の場合

例 (10) は、ツール・ド・フランスに参加していた選手が、競技中にケアスタッフとぶつかった反動で地面に倒れてしまうというアクシデントを伝えている報道記事に添付されていた写真の解説文である。また例 (11) は、自転車から落下した際の痛みを和らげるために手袋をはめることの有用性を説いている記事である。

(10) « *Luke Durbridge, participant du Tour de France, s'est retrouvé à terre après avoir percuté un soigneur* »⁸. (再掲)

(11) « (...) *Se retrouver par terre sans gants peut se révéler douloureux. La chute, c'est bien pour cela que les gants sont utilisés depuis des années pour protéger les mains.* (...) »⁹
(再掲)

例 (10) に関しては、いずれのインフォーマントも、報道写真の解説文としては *par terre* よりも *à terre* のほうがより適切、あるいははるかに適切と回答した。例 (11) に関しては、文脈的に *à terre* よりも *par terre* のほうが適切との回答が 1 件、また、文脈的に *par terre* は全くおかしくないが、*à terre* への置き換えは奇妙であるとの回答が 1 件であった。上記 2 例では、いずれも自転車からの落下が問題となっているが、大きな違いは競技中の落下であるか否かということである。まず例 (10) を見てみると、競技成績に影響を及ぼすような自転車からの落下が問題となっていることが分かる。事実、この抜粋に続く文では、この落下とその後の選手の成績が関連付けられて述べられている。よってこの例では、競技成績に関わるような特別な意味を持つポジションに競技者が身を置くという事態に言及していると言える。ここで、*se retrouver à terre* という表現について「*se retrouver*」を X、「*terre*」を Y と定義すると、Y は文脈において質的特異性を帯びたものと捉えられており、その特異性によって X を特徴づけていると言えるのではないだろうか。一方例 (11) では、自転

車から落下した際の痛みと言及しており、競技の成績とは関連付けられていない。よって、この例において「terre」が質的特異性を帯びていると捉えられているとは考えにくい。

2.3. Tomber (à / par) terre の場合

例 (12) は、木の実や果実などの収穫方法について言及している文である。例 (13) は、ニュートンが万有引力を発見するきっかけとなった出来事を紹介している文である。

(12) « (...) Récolte par ramassage : Il est à noter pour les arbres à hautes tiges ou de plein vent, que certaines façons de récolter des paysans en ce qui concerne les châtaignes, glands, noix, noisettes, olives, pommes, etc... ne se pratiquent qu'une fois les fruits naturellement tombés à terre. »¹⁰

(13) « (...) La première chose à laquelle il pensa ensuite fut la déduction suivante : cette pomme était située à 5 mètres du sol et il était tout naturel qu'elle tomba par terre. Si la branche de l'arbre où était posée cette pomme était deux fois plus haute, la pomme serait aussi tombée par terre, naturellement. (...) »¹¹

例 (12) に関しては、いずれのインフォーマントも *à terre* のほうが適切であると回答した。また例 (13) に関しては、いずれのインフォーマントも *par terre* のほうが適切であると答え、*à terre* にすると少しおかしい、またはかなりおかしいと回答した。いずれの例においても、木の実や果実が地面に落下することが問題となっているが、例 (12) を見てみると、「terre」は、木の実や果実が熟した結果として位置する空間であるのに対し、例 (13) では単にリンゴが落ちる場所であることが分かる。つまり、例 (12) では、木の実や果実のポジションとして「terre」が特別な意味を持っていると考えられるが、例 (13) ではこのような特徴は見られないということである。

次に、動詞 *tomber* の主語が人を表す場合を見てみよう。例 (14) は、2009 年にイギリスで起きた Tomlinson 事件に関する報道記事に添付されていた写真の解説文である。この事件では、Ian Tomlinson という一般市民が警察官から地面に突き倒され、それが元で後に心臓発作を起こし死亡してしまう。そして例 (15) は、相談サイトに掲載された、ある一般人の投稿文からの抜粋である。いずれの例においても、人が地面に倒れるという点では同じである。

(14) « Tomlinson tombant à terre, poussé par le policier derrière lui »¹².

- (15) « (...) j'ai mon copain qui s'amuse à me faire tomber par terre tout le temps. Du coup j'aimerais en faire autant mais je suis une fille et il est assez baraqué (...) »¹³.

例 (14) に関しては、いずれのインフォーマントも *à terre* のほうが適切であると回答し、例 (15) については、*par terre* は問題ないが *à terre* への置き換えは不適切であるとの回答で一致した。まず例 (14) は、Tomlinson 氏が死に至るまでの経緯を報道するための記事に付随した文である。「*Terre*」は被害者が致命傷を受けた場所であることから、執筆者は、「*terre*」が被害者の死に結び付けられた特別な意味を持つ空間であることを認識した上で書いたものであると当然考えられる。一方例 (15) においては、「*terre*」は人が転んだ結果として位置する場所にすぎない。

2.4. *Assis (à / par) terre* の場合

例 (16) は、ルーブル美術館が web 上で公開している、14 世紀イタリアの画家アンブロジオ・ロレンツェッティの作品¹⁴についての解説である。例 (17) は、デザイナー兼装飾家の Vincent Darré 氏の展示会に関する新聞記事からの抜粋であり、自身が展示した一連の家具及びオブジェについて氏がコメントしている箇所である。

- (16) « *La représentation du Calvaire, avec la Vierge et saint Jean l'Évangéliste assis à terre en signe d'humilité, semble s'être développée en Toscane durant le premier tiers du XIV^e siècle. (...)* »¹⁵

- (17) « (...) *C'est un hommage aux années 1920 et à mon enfance où les enfants regardaient la télévision debout dans la rue ou assis par terre dans les boutiques des quartiers (...).* »¹⁶

例 (16) に関しては、いずれのインフォーマントも、*à terre* のほうがより適切、あるいははるかに適切だが、*par terre* でもおかしくはないと回答した。また例 (17) については、*par terre* の *à terre* による置き換えはかなり不適切であるとの回答で一致した。

まず例 (16) においては、例文中の *assis à terre en signe d'humilité* という部分からも分かるように、「*terre*」は恭順の態度に結び付けられた特別な意味を持つ空間として認識されていると考えられる。一方例 (17) では「*terre*」は座するための単なる一空間であり、特別な意味を持った場所として認識されているとは考えにくい。

2.5. Mettre qn./qch.(à / par) terre の場合

例 (18) は、Lucie Decosse という名の柔道選手の足跡および功績を紹介している記事からの抜粋である。そして例 (19) は、Maher という人物から暴力を受けたという一市民の証言を紹介している記事である。

(18) « (...) Lucie Decosse, (...), Multiples Championne du Monde et plusieurs fois championne d'Europe (...). Elle a effectué un parcours sans fautes et mis à terre toutes ses adversaires. (...) »¹⁷.

(19) « (...) Maher et sa femme s'étaient plantés devant chez moi et m'injuriaient en faisant des gestes obscènes (...). Un jour, (...) Maher m'a mis par terre, puis il a commencé à me frapper à coups de poing, (...) »¹⁸.

例 (18) に関しては、いずれのインフォーマントも *par terre* への入替えは不適切であると回答した。また例 (19) に関しては、*à terre* へ入れ替えると少しおかしい、あるいはかなりおかしいと回答した。例 (18) において、*mettre à terre* という表現は「負かす」という意味で使われている。よって、「*terre*」は競技での勝敗に関連付けられた特別な意味を持つ空間として発話者に認識されていると考えられる。一方、例 (19) では、「*terre*」が特別な意味を持った場所であると話者が認識しているとは考え難い。

以上の分析によって、*à terre* と *par terre* は入れ替えが自由であるとは言い難いこと、そして両者の間には一定の差異があることが分かった。その差異とは、*à terre* が選択されている場合は、文脈において「*terre*」が特別な意味を持った空間として捉えられており、*par terre* の場合は「*terre*」がそのような特徴を持たない単なる空間であると認識されているということである。

前置詞が異なるだけでこのような差異が生じていることから、*à terre* と *par terre* の意味的差異は、*à* と *par* の意味的差異と関連していると考えるのが妥当であると考えられる。では、これら二つの前置詞の意味的差異はどのようなものだろうか。次章では、*à* と *par* それぞれについて複数の用法を分析し、両者の意味的差異を明らかにする。そしてこの差異が *à terre* と *par terre* の差異にも反映されていることを示す。特に *par terre* については、「*terre*」がどのような空間を表しているのかが、この分析を通じてより詳しく分かるであろう。

3. 前置詞 *à* 及び *par* に関する考察

3.1. 前置詞 *à* に関する考察

まず、下記の例を見てみよう。

(20) a. *Tu peux jouer cette pièce à la guitare ?*

b. * *Tu peux jouer cette pièce à ma guitare ?*

例 (20) では、楽曲を弾くことが問題となっている。例 (20)a の場合、「*la guitare*」はギターという楽器の種類を表しており、ピアノやヴァイオリンなど他の楽器と質的な対立関係に置かれる。これらはそれぞれ固有の特徴を持った楽器であり、同じ曲を弾くとしても、その音楽効果は全く異なる。つまり、「*la guitare*」は、「*jouer cette pièce*」という行為を特徴づけられるような質的特異性を帯びていると言える。一方、例 (20)b に見るように名詞 *guitare* が所有形容詞に先立たれている場合は、「*ma guitare*」と他のギターとの対立、つまりギターという楽器に属する個体間での対立になり、「*ma guitare*」が質的特異性を帯びているとは言い難い。このように、この前置詞 *à* の用法を *X à Y* で表すとすると、*Y* はその質的特異性によって *X* を特徴づけていると言える。P. Cadiot (1991) と M. Gross (1990) は、前置詞 *à* に後続する名詞句が道具を表しているケースについて、語彙化できる場合が多いことを指摘している。例えば、*cuire au grill* は *griller*、*cuire à la poêle* は *poêler* というようである。これらの例は、*Y* (それぞれ「*le grill*」, 「*la poêle*」) の質的特異性によって *X* が特徴づけられていることを表すよい例である。そしてこれは、例えば柔道の話題に関する記事の中で、*mettre qn. à terre* という表現が「～を負かす」というように訳されることと通じる。

次は、動詞の主語が人間か動物かによって前置詞 *à* の許容度が異なる例である。

(21) (*Jean* /**Le chamois*) vit à la montagne.

まず、*Jean vit à la montagne* という発話文は、「ジャンは山暮らしをしている」と解釈でき、ジャンの生活スタイルを表していると言える。人間の生活スタイルは、他にも海辺での暮らし (*vivre à la mer*)、田舎暮らし (*vivre à la campagne*) などが考えられる。つまり、「*la montagne*」は「*la mer*」や「*la campagne*」などと同様に質的特異性を付帯していると捉えられ、その特異性によって「*vivre*」という行為を特徴づけているのだと言える。これに対し、シャモアは通常山のみに生息しているため、シャモアが「*vivre*」(*X*) という行為を行うこと

に対し、「la montagne」(Y)は何ら質的な特異性を付与しない。このように、YがXを特徴づけられるような質的特異性を持たないことにより、*Le chamois vit à la montagne* が非文となるのであると考えられる。

次は、動詞 *mettre* の目的語となっている名詞の指示対象の違いによって前置詞 *à* の許容度が左右される例である。

(22) a. « Tu peux mettre ce fromage au frigo ? Sinon, il va s'abîmer. »

b. *« Tu peux mettre cette clé au frigo pour la cacher ? »

日本語であれば、生鮮食品を冷えたところに置いておくためにも、また鍵を隠すのが目的である場合にも、「～を冷蔵庫に入れる」と言えるが、フランス語では、例(22)に見るとおり、冷蔵庫に入れる対象が何であるかによって *mettre qch. au frigo* という表現の許容度が変わってくる。この例では、チーズのように冷蔵庫に保存されるか否かによって鮮度の保持に影響を受けるような食品に関する場合は問題のない発話文になっているが、鍵のように鮮度の保持に関わりのない実体である場合は非文となっている¹⁹。このことから、*frigo* は *mettre qch. au frigo* という表現において単なる物理的な空間を表しているのではなく、例えば「食物保存を目的とした冷暗所」というような質的特異性を喚起していると言える。「Frigo」(Y)は、その質的特性によって「mettre ce fromage」(X)という行為を特徴づけていると考えられ、これが *mettre ce fromage au frais* と類義表現となっている所以であると思われる。

本章では、ごく限られた数ではあったが、前置詞 *à* の幾つかの用法を分析した。前章で分析した *à terre* を含む文との共通点は、X *à* Y という形式において、XがYの質的特異性によって特徴づけられているということであると結論付けることができる。

3.2. 前置詞 *par* に関する考察

本章では、前置詞 *par* の幾つかの用法を分析し、前置詞句 *par terre* の場合との共通点を探っていくことにする。まずは、下記の例(23)のように *par* の後続語が（広い意味での）媒介を表していると捉えられる場合を考えてみたい。

(23) *Pierre a envoyé le document à Marie par la poste.*

この例において、「la poste」は書類がピエールからマリーへ届けられるための媒介役であると捉えることができる。このような例においては、*par* の後続語が媒介を表していること、そしてそれが複数の媒介の中から選択されたものであるということのみが注目される傾向があるが、例 (24) のように否定形にしてみると、他に重要な要素があることが分かる。

(24) *Pierre n'a pas envoyé le document à Marie par la poste.*

この例は、ピエールはマリーに書類を郵送では送らなかったが他の方法で送ったと解釈できる。この解釈から分かることは、まず ピエールがマリーに書類を送ったことは否定されていないということ、そして書類をピエールからマリーへ移動させることのできる媒介者が「la poste」以外にも存在するということである。つまり、例 (23)-(24) では、ピエールがマリーに書類を送付したことは明らかであるが、その送付の媒介役を果たすことができる送付手段のうちどれが選択されて書類の移動が実現されたかということが問題となっていると言える。例 (23) について、書類の初期のポジションであるピエールを A とし、目標とされるポジションであるマリーを B とすると、次のようにまとめることができる。

- A と B の間には断絶があり、媒介を介さなければ A から B への到達は不可能である。
- A から B への到達を可能にする一連の媒介群が存在する。これらの媒介群は、「A から B への到達を可能にする」という条件のもとで関連付けられた、閉じられた選択肢群であると言える。
- A から B への到達は、どの媒介によっても潜在的に実現可能であるが、実際に実現するためには、どれか一つの媒介を選択しなければならない（二つの媒介を同時に選択することは物理的に不可能である）。このため、目的実現のために「選択された媒介」（「la poste」= Y）と「（その他すべての）選択されなかった媒介」（Y'）という対立が起きる。

Y は、A から B への到達を実現させる媒介として他の媒介（Y'）との競合関係なしには考えられないため、Y は Y' に対して依存関係にあると言える。同時に、「選択された媒介」（Y）は「（その他すべての）選択されなかった媒介」（Y'）に対して排除的な関係に置かれていると言える。よって、Y は Y' に対して依存・排除の関係に置かれていると言える。

発話文 *Pierre a envoyé le document à Marie par la poste* では、断絶によって阻まれた二つのポジション A と B の存在は、*par* に先立つ部分（X *par* Y という形式における X に相当）によって想起され、「選択された媒介」（Y）は *par* に後続する語句によって表される。そし

て、「(Y 以外のすべての) 選択されなかった媒介」(Y') は言外での想起となる。この発話文に関し、「他の方法ではなく郵送で送った」という解釈生まれるのは、依存・排除の関係に置かれている Y と Y' が、いずれも X の実現を潜在的に可能としている媒介の選択肢群を構成していることにより、X - Y という関係が、成立しなかった X - Y' の存在を含意するからであると考えられる。

同様の特徴を共有する例として、*passer par Lyon pour aller à Marseille, entrer dans la maison par la porte principale, envoyer un colis par avion, saisir qn. par le bras* など多数挙げられる。

では次に、*par* の後続語が媒介を表しているとは捉えられない場合を見てみよう。

(25) *Jean a lancé un plat par le visage à Marie.*

この例において、「le visage」は投げられた皿の最終到達地点であり、「lancer un plat」という行為を遂行するための媒介ではないことは明らかである。この例文は、「ジャンはマリーに対し、皿を顔のような部位に投げつけた」と解釈できることから、「le visage」は単なる物理的な身体部位を表しているのではなく、質的な付加価値を帯びていると推測できる。確かに顔は、人間が社会生活を送る上で腕、脚、肩などの他の身体部位とは同列には扱えない重要な部位である。また下記に示すとおり、身体部位を表す語句のうち *par* に後続できるのは *le visage* 以外に皆無であることから、やはり「le visage」は質的な付加価値を帯びていると考えられる。

(26) *Jean a lancé un plat par (le visage /*le bras /*la jambe /*le pied /*le ventre) à Marie.*

例 (25) は、「～皿を顔のような部位に投げつけた」と解釈できると先述したが、このような解釈が生まれるのは、暗に顔という部位が他の部位に対比されているからであると考えられる。となると、厳密には「～皿を他の部位ではなく、顔のような部位に投げつけた」という解釈になると言える。この解釈における顔とその他の部位の対比関係は、「人間の身体部位のなかで重要性を持つ部位」と「特に重要性を持たないその他の単なる部位」というような対比であると考えられるので、顔という部位は「その他の部位が保持していない特質を持っている部位」であると捉えられていると推測できる。ここで、*lancer un plat par le visage à qn.* という表現を X *par* Y という形式に当てはめ、「lancer un plat à qn.」を X、「le visage」を Y、顔以外の部位を Y'(Y 以外) と定義して考えてみたい。まず先述の考察か

ら、Y の性質は Y' に対して排除的であると同時に、その排除的な関係に依存して定まっているため、Y は Y' に対して質的な排除・依存関係に置かれていると言える。次に、これら Y、Y' と X の関係を考えてみると、Y と Y' は、行為 X が潜在的に実現可能となっている限定された範囲（つまり行為 X を被る人物の身体）の構成要素を成していることが分かる。よって Y と Y' は「行為 X を潜在的に実現可能としている部位の集まり」と規定されるような閉じられた選択肢群であると言える。

以上のように、Y、Y' が X を潜在的に実現可能としている閉じられた選択肢群であり、また Y が Y' に対して質的排除・依存関係に置かれていることより、X - Y という関係（顔という重要な部位に皿を投げつけること）が、実現されることのなかった X - Y'（特に重要性を持たない顔以外の単なる部位に皿を投げつけること）という関係を想起させ、その結果として、*lancer un plat par le visage à qn.* という表現が「～皿を他の部位ではなく、顔のような部位に投げつける」と解釈されるのだと考えられる。

さて、例 (25) で示したような用例と *par* の後続語が媒介を表していると捉えられる場合とを比べてみると、いずれの場合においても、Y と Y' は X の実現を潜在的に可能としている閉じられた選択肢群を構成しており、また Y は Y' に対し排除・依存の関係に置かれていることが分かる。これらの特徴のために、X - Y という関係が、実現されることのなかった X - Y' という関係を想起させるというのも共通している。違いは Y と Y' 間の排除・依存関係の成立の仕方である。発話文 *Jean a lancé un plat par le visage à Marie* の場合は、*par* の後続語句である *le visage* が人間の身体の一部であり、またその中で特に重要な部位を表していることから、他の身体部位に対する質的排除・依存関係を想起させる性質を左既にそれ自身で潜在的に備えていると言える。しかし、*par* の後続語句が媒介を表している例である *Pierre a envoyé le document à Marie par la poste* という発話文の場合、*la poste* という語句のみでは場所を表しているのか発送手段を表しているのか明らかではないため、「*la poste*」がどのような選択肢群に属するのか分からない。よって、他の何らかの実体に対する排除・依存関係を想起させる性質をそれ自身で潜在的に備えているとは言えない。この場合、*par* に先立つ部分（X *par* Y という形式の X に相当）において、断絶関係に置かれた二つのポジションの媒介が問題となっていることが明らかとなることにより、「*la poste*」が発送手段としての選択肢群に属するものとして捉えられ、他の発送手段との排除・依存関係を想起させることが可能となるのだと考えられる。

このように、*par* の用法間においては Y と Y' 間の排除・依存関係の成立の仕方が異なるものの、統一的な法則による説明は十分可能であると考えられるのである。

続いて、前置詞句 *par terre* について見ていきたい。

Par terre は、先に見た *lancer qch. par le visage à qn.* の用法と同様、*par* の後続語が他の語に置き換えられないという特徴を持つ。次の例 (27)–(28) に見るとおり、空間を表す語の中で *par* に後続できる語は唯一 *terre* のみである。

(27) *s'asseoir (par terre /*par chaise /*par banc /*par canapé)*

(28) *poser qch. (par terre /*par sol /*par table /*par étagère)*

よって、*terre* は他の空間が持たない質的価値を持った空間を表していると考えられる。しかし、それは具体的にはどのような質的価値なのだろうか。まずは、筆者のフランス人の友人によって実際に発せられた下記の発話文について考察することから始めたい。

(29) « *C'est pas la peine que tu m'invites au restaurant pour t'avoir fait dormir par terre.* »

筆者は以前、このフランス人の友人宅に泊めてもらった際に、床の上に敷いた布団に寝かせてもらったことがあるのだが、そのお礼にレストランで御馳走すると言ったところ相手から発せられたのが上記の発話文である。この発話文からは、「なにもそんなところに寝かしたのにごちそうしなくてもいい」と発話者が言いたいのだということが分かる。この発話文には、フランス人による « *terre* » の捉え方が表れていると思われる。フランスでは、日本と違って床に座ったり寝たりするなどということは伝統的にせず、「*terre*」は基本的に人間の足だけが接触するような場所となっている。また、*mettre qn. plus bas que terre*（～を軽蔑する、ないがしろにする）という表現からも、少なくとも « *terre* » は、「人間が通常身を置かない、世のあらゆる空間の中で最下位に位置する空間」であると捉えられているのではないかと考えられる。以上のことから、例 (29) において « *terre* » (Y) は、「« *terre* » から上にある、人間が通常身を置いている空間) (Y') と対比されているのだと推測できる。つまり、「*dormir*」という行為が行われる空間として、Y が Y' に対して質的排除・依存関係に置かれていると言える。

しかし、「人間が通常身を置かない、世のあらゆる空間の中で最下位に位置する空間」であるというのが、「*terre*」の捉えられ方の全てを表してはいないと思われる。なぜなら、*avoir les pieds sur (la) terre*（現実を踏まえている、良識を持っている）、*revenir sur terre*（現実に戻り）などの表現に見られるように、「*terre*」は支えとなる空間であるとも捉えられているように考えられるからである。確かに支えというのは、何かの土台などの上でも得られるが、やはりこの世に存在する空間の中で人間（またはその他の生物および非生物）

が最大の支えを得ることができるのは「*terre*」に相当する空間である。これらの考察も踏まえると、「*terre*」は「人間が通常身を置かない、世のあらゆる空間の中で最下位に位置する空間であり、また人間（またはその他の生物および非生物）にとって最大の支えとなるような堅固な空間でもある」というように、他の空間が保持していない性質を集結した空間であると捉えられていると考えられるのである。以上の考察を踏まえると、第2章において前置詞句 *par terre* が選択されている場合についてより良く理解することができる。まず例(9)では、人間が通常身を置かない、世のあらゆる空間の中で最下位に位置する空間に身を投げて駄々をこねるということであり、例(11)、(15)、(19)では、いずれも地面に落ちる、または転ぶということが問題となっているが、これらの例において「*terre*」は、人間が通常身を置く空間からそうではない空間への転落を意味していると考えられる。また、痛みをも生じさせ得るような堅固な空間であるとも捉えられていると思われる。例(13)は、世のあらゆる空間の中で最下位に位置する空間であり、且つ人間その他の生物、あるいは非生物にとって最大の支えとなるような空間にリングが落ちるということであると考えられる。例(17)は、イスなどに座るのではなく、人間が通常身を置かない、世のあらゆる空間の中で最下位に位置する空間に座ることが問題になっていると解釈できる。

まとめ

以上の分析から明らかになったことは、まず *à terre* と *par terre* は文脈において「*terre*」がどのような捉えられ方をしているかによって使い分けられているということ、そしてその捉えられ方の違いには *à* と *par* の意味的差異が関連しているということである。両前置詞の意味については、紙面の関係上、ごく限られた数の用法による分析に留めたが、全く違う用法であると思われる場合であっても統一的な説明が可能であることを示すことができたと思う。*A terre* と *par terre* 以外にも、類義であると考えられている前置詞句は数多く存在し、例えば (*à / de nouveau*, (*en / dans*) *tous les cas* など枚挙にいとまがない。これらの前置詞句に関しても、それぞれの句に含まれている前置詞の意味を分析し、それがどのように各句の使われ方に反映されているかを考えていくことによって、類義関係にある前置詞句間の違いを明らかにすることが可能であると考えられる。

註

- 1 いずれも『地面に』、『床に』、『地に』などと訳し得るが、文脈によって使い分けられ、意味やニュアンスが異なる。
- 2 <http://www.ouest-france.fr/tour-de-france-mis-terre-un-coureur-sen-prend-un-soigneur-2717543>

- 3 <http://www.directvelo.com/actualite/26424-ces-coueurs-qui-ne-prennent-pas-de-gants.html#.VGckosmUKnE>
- 4 <http://forums.madmoizelle.com/sujets/en-ce-moment-oui-la-maintenant-tout-de-suite-dis-nous-tout.46212/page-712>
- 5 Trésor de la Langue Française Informatisé からの引用 (見出し語は *terre*)。
- 6 <http://www.sport.fr/judo/championnats-du-monde-de-judo-2014-teddy-riner-en-sept-titres-358559.shtml>
- 7 <http://www.parents.fr/Psycho-Sexo/Les-questions-au-psychologue/Il-se-jette-par-terre-de-colere>
- 8 <http://www.ouest-france.fr/tour-de-france-mis-terre-un-coureur-sen-prend-un-soigneur-2717543>
- 9 <http://www.directvelo.com/actualite/26424-ces-coueurs-qui-ne-prennent-pas-de-gants.html#.VGckosmUKnE>
- 10 <http://fr.ekopedia.org/Glaner>
- 11 <http://astronomie-smartsmur.over-blog.com/article-4-12-la-pomme-de-newton-98826737.html>
- 12 http://fr.wikipedia.org/wiki/Affaire_Ian_Tomlinson
- 13 http://forum.aufeminin.com/forum/couple1/_f609820_couple1-Comment-faire-tomber-un-homme-par-terre.html
- 14 作品名 : *La Vierge et l'Enfant dans le médaillon trilobé, Le Calvaire*, 1330 – 1335 年頃作。
- 15 http://cartelfr.louvre.fr/cartelfr/visite?srv=car_not_frame&idNotice=1261
- 16 http://abonnes.lemonde.fr/style/article/2014/06/03/au-bonheur-des-meubles-et-objets_4430806_1575563.html?xtmc=par_terre&xtcr=55
- 17 <http://www.judokastriote.fr/index.php?rubrique=4>
- 18 http://abonnes.lemonde.fr/archives/article/1999/12/24/le-zele-mortel-d-un-infirmier_3603800_1819218.html?xtmc=mis_par_terre&xtcr=17
- 19 もし、引き出しや箱などと同様、鍵を隠すための単なる空間と捉えるのであれば前置詞は *à* ではなく *dans* が用いられる。例 (22) の前置詞を *dans* に置き換えると、逆に *a* は奇妙な発話文となり、*b* は問題のない発話文となる。

(22)' a. ?« Tu peux mettre ce fromage dans le frigo ? Sinon, il va s'abîmer. »

b. « Tu peux mettre cette clé dans le frigo pour la cacher ? »

参考文献

- Cadiot, P. (1991) « *A la hache ou avec la hache ?* Représentation mentale, expérience située et donation du référent », in *Langue Française* n°91 : 7-23.
- Cadiot, P. (1997) *Les prépositions abstraites en français*, Paris, Armand Colin.
- Culioli A. (2000) *Pour une linguistique de l'énonciation* Tome 1, Paris, Ophrys.
- Gross, M. (1990) « La caractérisation des adverbes dans un lexique-grammaire », in *Langue Française* n°86 : 90-102.
- Gougenheim, G. (1939) *Système grammatical de la langue française*, Paris, D'Artrey.
- Grevisse, M. et Goose, A. (2007) *Le Bon usage*, Bruxelles, De Boeck Duculot.
- Homma, Y. (2005) « La source de 'l'approximation' dans *par ici*, *par là*, *par là-bas* », LINX 54, Université de Paris X : 121-134.
- Homma, Y. (2009) *L'identité des prépositions dans leur variation : Approche énonciative de 'en', 'dans', 'pour' et 'par'*, Thèse de doctorat en Sciences du Langage, Université de Paris Ouest Nanterre La Défense.
- 本間幸代 (2015) 「前置詞 *à* と *par* の意味的差異に関する一考察」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第 24 号、pp. 1-14.